訓點語彙の一考察

築島裕

第一章　研究方法について
第二章　訓點特有語彙の語性別一覧
第三章　異なり語數と使用回數
第四章　訓點特有語彙の特性
第五章　訓點特有語彙の語構成

第一章　研究方法について

中古の漢文訓點資料の語彙については、既に先學も屢〻說かれた所である。私も嘗て、訓點語彙を綜合的、體系的に論じようと試みたことがあつた(「平安時代の漢文訓讀について」國語と國文學第二十六卷第五號、昭和二十四年五月)。しかし現在となつては、方法論についても、結論についても、舊稿を訂正、發展すべき個所を多く認めるに至つた。本稿ではこの訓點語彙研究を、方法論から始めて根本的に考へ直して見ることにしたのである。そして、私の考へ得る、又爲し得る範圍で、その一つのケースを實際に行つて見たいと考へる。

從來、學界一般に受取られて來た「訓點語彙」なるものは、これを一口で言へば、珍奇な資料であり、奈良時代語資料や平安時代假名文學資料の缺を補ふ資料として重視されてゐた。確かに、從來の訓點研究はこの點に力が注がれて來たのであり、それによつて擧げられた業績が、國語史研究の發展に著しく貢獻して來たことも、事實である。このやうな從來の方向に對して故らに異を立てるわけでないことは勿論であるが、訓點語彙研究の分野は、なほもつと外にも開拓し得るであらうと考へて見た。そして、基本的な研究上の條項として、次の諸點を擧げ得ると考へるに至つた。

㈠、訓點語彙の母體である訓點資料は、すべてが一樣の性格を有するものではなく、文獻によつて相當の相違點が認められる。そして、それに伴なひ、訓點語彙の性格にも文獻ごとに出入がある。從つて、訓點語彙を調査するには、訓點資料を個々別々に區別して取扱ふべきであつて、平安初期のものか

ら中世のものまで、又、漢籍・佛典・日本書紀の類などを全部一括し、その中から適當な用例を拔出して論ずることは、訓點語彙の性格をぼやかしてしまふ虞がある。

(二)、訓點語彙は、訓點資料の中に表はれたすべての語彙を網羅して扱ふべきである。それら全語彙を、語の性格によつて分類し、その類ごとに檢討すること。

(三)、どのやうな語彙を用ゐるかといふことと並んで、異なり語數(注1)や使用回數をも調査すること。

(四)、研究のためには、二つ以上の資料を比較することが有益である。訓點語彙の研究に際しては、それと最も對蹠的な立場にあると考へられる、平安時代假名文學語の語彙と比較することが好都合である。

訓點資料は、時代を平安時代のものだけに限つても、現在知られてゐるものは尨大な量に上るのであり、なほ將來も數多くの資料が發見されるであらう。所が、その既知の資料ですら、內容の全貌の公表されてゐるものは極く少數であり、語彙の索引が出來てゐるものに至つては、殆ど稀である。右に考へたやうな調査をしようとすれば、それに先立つて、すべての訓點資料について個個に、全訓み下し文を作り、又、全語彙索引を作ることが、嚴密に言へば、必要である。しかし今日の研究段階で、かやうな作業を直ちに完成することは到底望めない所である。又、訓點語彙の性格の大綱を摑まうとするには、私の考へでは、必ずしもあらゆる訓點資料を虱潰しに調査し盡す必要はないのであつて、多くの資料の中から、代表的な文獻數種類を拔出して、それぞれについて檢討すれば、大凡の目的は達せられるだらうと考へる。又一方、訓點資料と比較すべき、平安時代の假名文學語の資料を見ても、最近は校本・索引の類が續々公刊され、研究上の便宜が急速に增加したが、それでも未だ全文獻について完備したとは言ひ得ない。けれども、その中で最も代表的な大作たる源氏物語の校本と總語彙索引が完成してゐることは、この研究にとつても無上の好條件であるといへるだらう。

訓點語彙の原となる訓點資料の代表として私は興福寺藏本「大慈恩寺三藏法師傳」の、永久四年(一一一六)點と承德三年(一〇九九)點とを取上げ(以下これを「慈恩傳古點」と略稱する)、この中に用ゐられてゐるすべての語彙(和訓)と、源氏物語のすべての語彙とを比較檢討することにした。この訓點資料は、全十卷の完本であり、本文の書寫は延久三年(一〇七一)で、その後、寡應二年(一一七〇)に至るまで都合六種類の訓點が付いてゐるが(注2)、右に擧げた永久點は卷第一の中途から始まつて卷第六の終まで、承德點は卷第七の初から卷第十の終までに付いてをり、この二種の訓點だけで全訓點の大部分を占めてゐる。本文の內容は、唐僧玄奘三藏の傳記で、前半は西域・印度の旅行記であり、後半は歸朝以來死に至るまで主として譯經に從事した生涯を記し、その間に記された四六駢儷體の上奏文などが多きを占めてゐる。從つて內容には記事文や駢儷文が多いので、その結果として、自然、語彙の變化にも富んでゐるのである。

訓點資料の中でも、平安時代前半期のものと、平安時代後半期のものとは、性質が異なるやうで(注3)、前半期のものは奈良朝語の影響を未だ多分に殘してをり、しかも讀法が固定せず浮動的

な傾きがあるのだが、これに對して平安後半期の資料では、讀法が固定し、その固定した讀法が後世まで長く傳へられて行つたもので、後世にいはゆる訓讀語の體裁を備へた資料としては、この平安後半期のものを最古と認めて良いやうに考へられる。訓讀資料の代表として、平安後半期の資料たる前記點本を選んだのは、このやうな考へに基づくものである。又、訓點資料は、これをその原漢文の性質に基づいて分類すると、佛書・漢籍・日本書紀の類・變體漢文、などに分れるのであり、それぞれの類ごとに訓讀の用語に特色が認められるやうである（注4）。從つて本稿のやうな語彙の共時論的研究は、この「慈恩傳古點」ばかりでなく、これと別に、平安後半期の點本についても、漢譯佛典・博士家點本・日本書紀の類など、各個に、本稿と同樣な方法で行ふべきであるし、又、平安前半期や鎌倉期以後の資料についても同斷であつて、この資料はどこまでも「平安後半期の佛書の中の一類」の代表資料といふ域を越えることは許されないと思ふ。ただ、各種の訓點資料を比較して考へた結果では、この種の資料は漢文訓讀の用語としての性格を最も端的に表はしてゐるものであり、語彙や語法や文法などの面で、他種のものよりも、種類や型式が多いと考へて良ささうである。

「慈恩傳古點」を、訓點資料の代表として本稿が取上げた理由は、大體右の通りだが、この文献にはこの外にも、研究資料として次のやうな利點がある。

㈠、一部十卷が完備して居て、缺失部や蟲損の部分が殆ど無く、全卷に訓點が附けてあつて、かなり精密な訓み下し文を作ることが出來る。

㈡、ヲコト點は極く稀で、殆ど全部が假名訓である。その爲に、比較的た易く讀解くことが出來、又、讀解くことの出來ない個所や、讀み方に疑を存する個所などが非常に少數である。

㈢、假名を用ゐて漢字の和訓や字音を書き記したものが非常に多いので、漢字の讀み方を明確に定め得る場合が比較的多い。

㈣、同じ墨色の異筆が混入してゐないから、他筆と讀み紛れる虞がない。（當時の訓點には異筆が錯雜する例が相當に多いものである）

㈤、內容が記錄文及び四六駢儷體である爲に、語彙の種類（異なり語數）が多い。

㈥、加點した人物の性格が、少しではあるが、判つてゐる。

㈦、全卷を精査する便宜が得られた。

このやうな利點に對して、一方には、缺點と考へられることもあるのである。

㈠、永久點承德點ともに移點の訓點であるが、もとの祖點の性格やその年代が不明である。從つてこの訓點の言語の實質的年代が、永久四年・承德三年より古いことは言へるが、それが何年位遡り得るかが明でない。

㈡、移點の際の誤寫と考へられる個所がある。

㈢、前述のやうに、卷第一から六までが永久四年（一一一六）の移點、卷第七から十までが承德三年（一〇九九）の移點であるが、この二つの訓點を混一して扱ふことが果して許されるかどうか、問題がある。もし或る程度等質的であることが立證

し得るならば良いが、それは相當に困難なことであり、これらを夫々別個に取扱ふならば最も確實なわけだけれども、それだけでは異なり語數が相當に減つてしまつて、研究上不便である。

このやうな狀態であるけれども、目下の處は資料としてこれ以上優れたものを見出すことが出來ないので、敢へてこの資料に基づいて調査を進めることにしたのである。上述の「缺點」の中の第㈢、卽ち、永久點と承德點とを混同して扱ふことについては、抵抗を感ずるのであるけれども、次のやうな諸條件があるので、一應等質的なものと見做しても甚だしい誤に陷ることはあり得まいと考へて、この二種の訓點を同一種類のものとして扱ふことにしたのである。

㈠、永久點には加點者・加點場所についての識語が無いけれども、墨筆の假名訓に交つて所々に斷片的に遺されてゐるヲコト點が、喜多院點であり、このヲコト點は當時興福寺など法相宗で多く用ゐられたものだから、興福寺の僧の加點に成つた可能性が大きい。各卷に押してある「興福寺印」の朱印も相當に古いもののやうに見える。これに對して承德點の方は加點者が僧濟賢である旨、又、「興福寺勝福院」で移點した旨の識語があり、濟賢は興福寺の僧であるから、このことは永久點・承德點の親近性を同はせるのである(注5)。

㈡、永久點と承德點とに見える語彙(字音語は固有名詞をはじめ名詞の類が極めて多いので除き、和語だけに限つて數へた)の數と、その使用回數とを別々に計算し、更に、兩者に共通して用ゐられる異なり語數と使用回數とが、その中でどんな比率を占めるかを調べた所、第一表の結果を得た。

〔第一表〕

	異なり語數	總使用回數	一語當り平均使用回數
永久點だけにある語	445 (26.8%)	991 (3.6%)	2.0回
承德點だけにある語	292 (17.5%)	492 (1.9%)	1.7回
兩者共にある語	925 (55.7%)	25,930 (94.6%)	28.1回
計	1,662(100.0%)	27,413(100.0%)	16.5回

なほこの計算では、全和訓を書表はしたものは勿論のこと、一部分だけ記してあつて他の部分を補讀すべきもの、全く記載がなくて全部を補讀すべきものも、等しく一語づつとして數へた。又、「使(シム)」「可(ベシ)」「如(ゴトシ)」「之(ノ)」「許(バカリ)」のやうに、普通、助動詞や助詞とされてゐる和語は、それが漢字の訓として用ゐられてゐるものでも、省いた。又、「西ノカタ」「無カラムコトヲ」などの「カタ」「コト」のやうに補讀した名詞も、算入しなかつた。又、和語としては同一語でも、もとの漢字が異なるものがある(「塵(ケガス)」「穢(ケガス)」「穢(ケガス)」「汚(ケガス)」など)が、これは全部同一語と見做して計算した(注6)。

右の表で見ると、語彙の共通するものは全語彙の 55.7% を占めてゐるのに過ぎないが、その共通に用ゐられてゐる語彙の使用回數は、94.6%にも上つてゐる。これは言ひ換へれば、共通に用ゐられてゐる語の一語當りの使用回數(28.1回)が、單獨に用ゐられてゐる語のそれ(永久點2.0回、承德點1.7回)よりも遙かに上回つてゐることを示してゐる。更に裏から言へば、使用回數

の多い語彙が兩方に共通に用ゐられてゐると言へる。

然し一面から見ると、永久點だけ又は承德點だけに獨自に表はれてゐる語に、その各々の點の特殊性乃至は表現上の個性が表はれてゐるのではないかとの疑ひも生ずる。しかし、多分、その虞れはないと思はれる。それは何故かと言ふと、これらどちらかの點に專用の語は、大部分が當時又はそれより少し後の時代の他の古訓點本に用例が見出されるからである。その一例を示す。

〔永久點だけにある語〕

イフナラク……神田本文集天永點。香藥鈔永萬點。

ナニトナラバ……高山寺本莊子鎌倉期點。日本高僧傳要文抄建長點。

オノヅカラニ……西大寺本金光明最勝王經永長點。圖書寮本文鏡秘府論保延點。

トコロドコロ……石山寺本成唯識論寬仁點。古文孝經仁治點。

〔承德點だけにある語〕

コハク（乞）……史記呂后本紀延久點。神田本文集天永點。前田本冥報記長治頃點。

スコブル……史記呂后本紀延久點。東寺本成就瑜伽觀智十二天儀軌久安點。

カツハ……史記呂后本紀延久點。圖書寮本文鏡秘府論保延點。

タチドコロニ……圖書寮本文鏡秘府論保延點。成簣堂文庫本醫心方院政期點。

カハルガハル……圖書寮本文鏡秘府論保延點。東洋文庫本春秋經傳集解保延點。石山寺本大唐西域記長寬點。

このやうな工合に、語彙の中殆ど大部分は當時の他の訓點本の傍訓に見出し得る。從つて、これらの語彙は、必ずしも永久點又は承德點だけの特殊な個性的表現ではないと言ひ得るであらう。（中に一二問題になるかと考へられるものもあるが、それだけからして全體を云々することは出來ないと思ふ）

さて、この古點と比較對照すべき假名文學作品の代表としては源氏物語を選んだ。その理由は

㈠、全卷が完備現存してゐること。

㈡、本文批判が爲されてゐること。

㈢、語彙索引が完成してゐること。

㈣、この種の文獻の中では後世最も重視され、和文の一典型とされて來たこと。

などが擧げられる。語彙對照に當つては、吉澤義則博士・木之下正雄氏「對校源氏物語用語索引」、池田龜鑑博士「源氏物語大成索引篇」の恩惠を受けた。

なほ、この兩文獻を比較するに就いては、年代のずれのことが問題になる。卽ち、「慈恩傳古點」の方は、前に述べたやうに、一〇九九年と一一一六年とであるが、これに對して、源氏物語の方は、明確な年代は知り得ないけれども、大體一〇〇五年前後とされてをり、この間に約百年の差があることになる。しかも一方では嚴密な共時論的記述を目指してゐるのだから、ここに矛盾が一つ生じることになるわけだが、やはりこの點は、他に適當な資料が見つからない限りは、黙過するより仕方がないやうに感じる。

第二章　訓點特有語彙の語性別一覽

「慈恩傳古點」の總語彙を五十音順に配列した索引を作り、それを源氏物語と對照した。この際、「慈恩傳古點」の中で、傍訓のあるものは問題ないが、傍訓が語の一部分しか無いもの、又は全く無いものが多いのであり、これらは、この訓點の中の他の用例、又は他の古訓點資料に徴して、最も妥當と考へられる訓法を假定してその位置に配列した。この點で調査の結果の正確さに相當の疑問も生じるかと思ふが、訓點資料の中で全漢字に傍訓を施したものは、中世以降ならばとにかく、平安時代では探しても恐らく得られないと考へられ、このやうなハンディキャップは、この古點のみならず、當時の訓點資料全般についての事柄だから、宿命的なこととして認めなければならないと思ふ。

語彙を對照した結果、整理の便宜を考慮して、語彙を次の十五種に分類することにした。

(一)、助動詞。(二)、助詞。(三)、接續詞。(四)、感動詞。(五)、陳述副詞。(六)、情態副詞。(七)、形式語の特殊用法。(八)、程度副詞。(九)、形容動詞語幹。(十)、特殊な副詞(單獨で連用修飾語となり格助詞を伴つて連體修飾語ともなり得る語)。(十一)、動詞。(十二)、名詞。(十三)、形容詞。(十四)、代名詞。(十五)、形式名詞。

字音語は一應除外し、專ら和語だけに限つた。又同一語はこの中の何れか一項に屬せしめ、二項以上に重複して屬せしめたものはない。又この配列順序は、(三)以下は訓點專用語彙使用回數の全和訓語彙使用回數に對する比率の高い順に並べたものである。

(一) 助動詞(受身、使役などの接尾語も便宜上併せ收めた)

1、受身。ルとラルを用ゐる。ユは「所謂」をイハユルと訓んだ例が3例。

2、可能。ル・ラルは用ゐない。可能表現としては「可(ベシ)・得(ウ)・(不)能(アタハ)」などがある。ユは「所有」をアラユルと訓んだらしい例1例。

3、使役。シムだけを用い、ス・サスは用ゐない。

4、回想。主にキを用ゐる。ケリは僅か5例ですべて終止形、何れも詠歎の意に用ゐてある。

5、完了。ヌ・ツ・タリ・リ。

6、斷定。ナリ・タリ。タリは所謂形容動詞語幹についた例も、一般の名詞についた例も、ある。

7、否定。ズとジ。ジの付訓例は24例。マジの例はない。

8、推量。ム・ベシ・マシ・ケム。但しマシはマシ3例・マシカバ1例・マシヤ2例だけ。ケムは終止形2例だけ。ラム・ラシ・メリ・ムズ・ナリは見えない。

9、比況。ゴトシを用ゐる。ヤウナリなし。

10、希望。タシ・マホシはない。希望表現は「願(ネガハクハ)」「請(コフ)」その他を用ゐる。

(二) 助詞

1、格助詞。ガ・ノ・ヲ・ニ・ト・ヨリを用ゐる。カラはミヅカラ・オノヅカラ・オノヅカラニ・テヅカラといふ成語の中に存するだけ。ヘは見えない。ニテはなく代りにニシテを用ゐる。尚、格助詞と同等の働きをする、ヲシテ・ヲモツテが見える。

2、接續助詞。バ(未然形接續・已然形接續とも)トモ・ドモ・テ・テモを用ゐ、ガユエニ・ヲモツテ・トイヘドモを接續助詞

のやうに用ゐる。接續助詞のド・ガ・ニ・ヲ・モノカラ・モノノ・デ・ツツは用ゐない。

3、副助詞。ノミ・バカリ・マデニが見える。ナドはない。ダモの疑はしい例1例、スラ2例、サヘ（サヘヲ）1例がある。古代語イはアルイハとしてのみ存在する。

4、係助詞。ハ・モ・ゾ・ヤ・カがあり、ナム・コソは見えない。ゾ・ヤ・カは、イカガ・イカゾ・イカニシテカ・イヅクンゾ・イハムヤ・ナスレカ・ナスレゾ・ナゾ・ナニカ・ナニヲテカ・ナニヲモテカなどの成語と、「何」など疑問語の後に見えるだけ。

5、終助詞。カ・カナだけ。ガ・ガナ・カシ・バヤは見えない。

6、間投助詞。ヤ（カナヤ）がある。シはイマシ・カラズ シモ等の成語の中だけ。ヨ・ヲ・ナは見えない。

㈢、接續詞

この項以下は、慈恩傳古點を中心として源氏物語と對照した結果を次の三つに分けて示すことにした。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

各語の下に（ ）で包んだ漢字は、原則として一字だけ擧げておき、同じ和訓の語で二つ以上の漢字の訓み方として見えてゐる時は、一つだけで他をも代表させた。又その下のアラビヤ數字は古點の使用回數（永久點・承德點の合計）を示す。

ⒶⒷⒸのうちで、ⒶとⒷとを「訓點特有語」として扱ふことにするが、これは全訓點資料に共通して特有の語だといふわけでなく、この「古點」に見えて源氏物語に見えない語といふ意味だけに止まるのである。これについては、第三章以下を參照されたい。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

カルガユエニ（故）1。カレ（故）4。ココニ（爰）102。ココヲモチテ（是以）13。コノユエニ（是故）27。コレニヨリテ（由是）16。コレヲモチテ（是以）24。シカノミナラズ（加之）14。シカウシテ（而）9。シカウシテノチニ（然後）11。シカルニ（然）5。シカニハアラズハ（不然）1。シカモ（然）38。シカルヲ（然）2。シカラバ（或はシカレバ）（然）9。シカリトイヘドモ（雖然）3。シカレドモ（然而）10。ソレ（夫）31。タダシ（但）66。モシソレ（若夫）4。ユエニ（故）32。ユエヲモチテ（以故）3。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

ソレ（夫）4。〔源氏2例。若紫卷北山僧都の詞。竹河卷夕霧の詞〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの（Ⓑを除く）。　なし

㈣、感動詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

ア（嗟呼）3。ヤア（嗚呼）1。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

アア（於）1〔源氏1例。若菜上卷明石上の母尼君の詞〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。なし

㈤、陳述副詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アニ（豈）88。アヘテ（敢）40。イカゾ（或はイカンゾ）（何）10。イヅクンゾ（焉）3。イハク（曰）426。イハムヤ（況）16。イフナラク（聞説）3。オソ（ル）ラクハ（恐）14。オモハク（謂）1。オモヘラク（謂）3。カツテ（曾）14。クルシブラクハ（苦）2。コタフラク（答）8。コハク（乞）1。コヒネガハクハ（庶）5。タトヘバ（譬）5。ナスレカ（何爲）1。ナスレゾ（何爲）1。ナニトナラバ（何者）1。ナニヨテカ（何因）9。ナニニヨリテ（何因）2。ナニノユエカ（何故）3。ナニヲモテカ（何以）10。ナホシ（猶）62。ネガハクハ（願）86。ノゾマクハ（望）11。ノタマハク（曰）4。マサニ（當・將）83。ムシロ（寧）10。ヨロコブラクハ（喜）2。ヨロシク（宜）28。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

イカニシテカ（何）6。〔源氏2例。少女巻内大臣の詞。椎本巻八宮の姫君の心。（イカニシテカハ）は別に數例あろ。〕

ケダシ（蓋）18。〔源氏1例。少女巻内大臣の文選の詞章朗詠〕

タトヒ（縱）8。〔源氏4例。薄雲巻夜居の僧都の詞。同巻冷泉院の心。東屋巻常陸介の詞。手習巻横川僧都の詞〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

イカガ（何）2。ナゾ（何）34。ナニカ（何）1。モシ（若）61。

㈥、情態副詞（所謂形容動詞の語幹を除く。所謂連體詞をも含む）

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アラカジメ（豫）8。アルイハ（或）48。イナヤ（不）9。イマシ（乃）100。イルガセニ（忽）1。オノヅカラニ（自）1。オモテゴトニ（面）2。カハルガハル（更）1。コトゴトク（悉）35。コトゴトクニ（悉）19。コモゴモ（更）5。コロニ（自）1。サイハヒニ（幸）16。シタガヒテ（シタガツテ）（隨）26。シバラクモ（暫）3。スデニ（既）226。タガヒニ（互）10。タチドコロニ（立）2。タメニ（爲）29。ツギテ（ツイデ）（次）2。ツトニ（夙）5。ツブサニ（具）36。トキニ（時）119。トコロゴトニ（處）1。ナラビテ（並）2。ナラビニ（並）120。ハジメ（始）10。ハジメニ（始）2。ハタシテ（果）4。ヒソカニ（潛）41。ヒトゴトニ（人）2。ヒトツヒトツ（一）1。フタリナガラ（兩）2。マゲテ（曲）13。マタハ（又）2。マチマチニ（區）1。ママ（間）4。ミチニ（道）4（途中ヂの意）。モシクハ（或）3。モチテ（モツテ）（以）84。モハラニ（專）2。ヤウヤク（漸）39。ヤウヤクニ（漸）7。ヤヤムズレバ（動）1。ユメ（努力）2（源氏物語では謀述副詞で下に禁止の語を伴ふが、本巻では情態副詞）。ヨリテ（ヨツテ）（仍）81。ヨリヨリ（時）1。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

アルトキハ（或）4。〔源氏1例。桐壺巻地の文〕

アルトキハ（或）3。〔源氏1例。桐壺巻地の文〕

イハユル（所謂）7。〔源氏1例。紅梅巻紅梅大納言の詞〕

ウタタ（轉）2。〔源氏2例。行幸巻は諸本多く「うたて」。手習巻妹尼の詞、これも「うたて」の本あり〕

カサネテ（重）35。〔源氏5例。葵巻地の文（「表を重ねて」の意とも見える）。明石巻地の文「又かさねて京へかへり給べき宣旨くだる」。繪合巻地の文「御ぞ又かさねて給はり給ふ」。薄雲巻夜居の僧都の詞。若菜下巻地の文「（源氏から）かくかさねてのたまへれば」。（外に明石巻明石入道の詞に1例あるがこれは河内本の一本だけで青表紙本など多く「かねて」とある）〕

コトゴトニ（事事）1。〔源氏1例。夢浮橋巻横川僧都の詞「ことごとには」〕

スナハチ（即）249。〔源氏2例。若紫巻地の文、「すなはち僧都參り給へり」。宿木巻薫の詞「すなはちも」〕

タマタマ（遇）7。〔源氏1例。朝顔巻源氏の詞〕

タヤスク（輒）9。〔源氏2例。少女巻夕霧の詞。總角巻薫の詞〕

トモニ（與）96。〔源氏1例。浮舟巻時方の詞〕

ハジメテ（始）37。〔源氏4例。空蟬巻源氏の詞。明石巻地の文、河内本「しみて」。柏木巻夕霧の詩句朗詠。宿木巻主上の詞。他に「いまはじめて」6例あり。〕

ヒネモスニ（終日）1。〔源氏3例。明石巻地の文「ひねもすにいりもみつる神のさはぎに」。總角巻地の文「（薫）日ねもすにながめくらして」。手習巻地の文「けふはひねもすにふく風の音もいと心ぼそきに」〕

マサニ（正）75。〔源氏1例。夕顔巻源氏の白氏文集朗詠〕

マノアタリ（面）3。〔源氏1例。帚木巻博士の女の詞〕

モハラ（專）5。〔源氏5例。夕霧巻律師の詞。東屋巻少将の詞に2例。同巻常陸介の詞。手習巻母尼の詞〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

アヒ（相）101。イタヅラニ（徒）7。イヘイヘ（家）1。オノオノ（各）87。オノヅカラ（自）7。オホヨソ（凡）14。カク（斯）1。カタガタ（旁）3。カチヨリ（歩）2。カツガツ（且）4。カツハ（且）1。カナラズ（必）33。カナラズシモ（必）7。カヘリテ（却）56。カリニ（假）3。ココロゴコロニ（心）1。ココロミニ（試）5。コトサラニ（故）2。シバシバ（屢）25。タダ（唯）70。タダニ（唯）5。タチマチニ（忽）26。ツキゴトニ（月）1。ツヒニ（遂）150。テヅカラ（手）1。トキドキ（時）4。トコロドコロ（處處）2。トシゴトニ（年）4。ナホ（尚）26。ニハカニ（俄）9。ヒトビト（人）2。ヒトヘニ（偏）1。フタタビ（再）16。ホトホト（殆）7。マタ（又）523。マヅ（先）23。ミナ（皆）143。モシハ（若）1。モトヨリ（本）11。ヤヤ（稍）4。ヨモニ（四方）4。ワヅカニ（僅）6。

㈦、形式語の特殊用法

次の諸語を含めたのであって、助動詞や助詞のやうな働きをするものを主として一括した。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

シカラズ（不然）2。モチテノユエニ（以…故）4。モチテナリ（以）5。タメノユエニ（爲…故）3。

Ⓑ源氏物語に見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

ヲモチテ（以）237。〔源氏1例。少女巻博士の作句の内容を叙した地の文〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

アラジ（非）3。アラズ（非）103。イヘドモ（雖）81。ノユエニ（故）48。

(八)、程度副詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

スコブル（頗）4。イタリテ（至）2。キハメテ（極）25。ホボ（略）6。マスマス（益）11。モトモ（最）22。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

ハナハダ（甚）51。〔源氏3例。少女巻博士の詞〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

イササカニ（聊）3。イヨイヨ（愈）25。サラニ（更）82。スコシ（少）13。

(九)、形容動詞語幹

この項に含めた語は、(六)情態副詞を除いたもので、次の四條件のうち少くとも一つを充たすものをさす。

一、ナラ・ナリ・ナル・ナレが付いた用例が本訓點の中にあるもの。イルガセニ・マチマチニのやうに、ニのついた例だけしかないものはこゝに入れずに(六)情態副詞に含めた。

二、ニシテ・ニス・ニスル・ニスレドモがついた用例が本訓點の中にあるもの。

三、末尾がヤカ・ラカで終るもの。

四、「肝衝（クワウ）トマユアゲニ」の「マユアゲ」のやうに、文選讀の一部をなしてゐるもの。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アタタカ（暖）3。アヲシロ（艾白）1。オギロ（隨）4。オゴソカ（嚴）4。オダヒカ（穩）1。クグセ（偃）1。サカ（ン）（盛）1。スコシキ（少）4。スミヤカ（速）16。ツヅマヤカ（約）1。ツマビラカ（詳）10。トコシナヘ（不古）1。トコメヅラ（長今）1。ナナメ（斜）1。ホシママ（縱）11。マダラカ（斑）4。マユアゲ（肝衝ト）1。ミダリ（妄）8。モモチ（百）2。マレラ（希）2。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

アラタ（新）9。〔源氏1例。鈴蟲巻源氏の詞〕シキリ（頻）15。〔源氏2例。薄雲巻夜居僧都の詞。少女巻地の文（河内本しきりて）〕タヘ（妙）8。〔源氏2例。梅枝巻源氏の詞。若菜上巻地の文（河内本なし）〕ナイガシロ（蔑）1。〔源氏2例。空蟬巻地の文。末摘花巻地の文〕ホガラカ（廓）13。〔源氏1例。若菜上巻乳母の上奏の詞〕ユタカ（裕）15。〔源氏5例。梅枝巻源氏詞。繪合巻地の文「やまみづのゆたかなる心ばへ」。若紫巻良清の詞。梅枝巻地の文「みづのいきをいゆたかにかきなし」。若菜下巻源氏の詞。〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

アキラカ（明）42。アザヤカ（鮮）4。アラハ（露）5。オホキ（大）55。オロカ（愚）1。オロソカ（疎）2。カスカ（幽）3。カタクヅレ（坂陁）1。キ（黃）1。クレナヰ（紅）1。コト（異）49。サカリ（盛）49。シヅカ（靜）9。

ソラ（諳）5。タクミ（巧）3。タヒラカ（平）4。ナゴヤカ（和）1。ナダラカ（悦）1。ネムゴロ（懇）6。ハルカ（遙）41。ヒトヘ（偏）1。ヒヤヤカ（冷）1。ホノカ（仄）2。マコト（誠）95。マレ（希）5。ヤスラカ（安）3。ヤハラカ（和）1。

(ｲ)、特殊な副詞（單獨で連用修飾語となり格助詞を伴つて連體修飾語ともなり得る語）

所謂「時の名詞」「時數詞」などといはれるものの他、普通に副詞とされてゐるが、ノを付けて連體修飾語にもなるもの（シバラク・シバラクノ）などを含む。名詞・副詞の項には入れない語である。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アクルアシタ（明旦）1。イカン（如何）10。コシゴシ（層）1。サイトコロ（近）2。シバラク（暫）26。チカゴロ（近）4。チタビ（千）1。ツギ（次）42。ヒムガシノカタ（東）31。ミナミノカタ（南）18。モロモロ（諸）74。ヨタビ（四）1。ヲチカタ（已去）1。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用法が限られてゐるもの。

クサグサ（種）3。〔源氏2例。繪合卷少女卷共に地の文〕

コノカタ（以來）37。〔源氏1例。須磨卷地の文、大島本「このかみ」、別本「こなた」〕

アル（或）1。〔源氏4例。帚木卷左馬頭の詞。同卷式部丞の詞。若紫卷地の文。東屋卷地の文。〕

ミタビ（三）4。〔源氏1例。少女卷地の文「一月に三たびばかりを」。他に「ふたたびみたび」2例あり〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

アマタ（數）2。アマタタビ（數）1。イニシヘ（古）9。イマ（今）65。キタノカタ（北）15。キノフ（昨）3。ケフ（今日）7。コトシ（今年）1。コノゴロ（近來）19。コロホヒ（頃）6。サキ（先）65。ツネ（常）85。ニシノカタ（西）21。ヒビ（日）7。フタツ（二）18。フタリ（二）5。ミツ（三）1。ムカシ（昔）100。ムツ（六）1。モト（舊）65。ヨタリ（四）6。スベテ（總）50。ヒトツ（一）73。ヒトリ（一）43。ヒトタビ（一）16。ミヅカラ（自）141。ソノカミ（當時）3。

(ﾛ)、動　詞

動詞を比較する際、次の諸項を基準とした。

一、訓點で「惟」「洞」（オモヒミル　ウガツ）のやうに一字の漢字に對して附訓してゐる複合動詞は、一語とした。

二、訓點で「崩倒」（クヅレフス）のやうに漢字二字に對して夫々一字毎に附訓してゐる場合は、二語とした。

三、源氏物語で「あけゆく（明行）」「こころおく（心置）」のやうな複合動詞は、一語とした。

四、「帶ぶ」と「帶」、「祭る」と「祭」などの語は互に別語とした。

五、Ⓑの項は、大體源氏物語の使用回數3以下のものを記した。

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アガク（躋）1。アガツ（斑）2。アガフ（贖）6。アクビ

ス（欠）1。アセヅク（汗）2。アタフ（〔不〕能）60。アタフ（與）18。アヂハフ（味）7。アドコフ（跨）1。アナホル（穴）1。アバク（發）2。アフドコフ（跨）3。アマス（餘）1。アマネハス（遍）1。アミス（網）1。アム（浴）6。アムドコフ（跨）1。アメフル（雨）1。アヤツル（藻）2。アユブ（歩）1。イカガス（奈何）1。イキドホル（憤）2。イコフ（憩）7。イサブ（叱）2。イソフ（競）1。イタム（痛）11。イヘス（舍）1。イヘキス（舍）1。イヤシム（陋）1。イヤシムズ（賤）1。イュ（愈）10。イル（鑄）4。ウカル（遊）1。ウグツク（驟）1。ウダク（懐）1。ウチケツ（撲）2。ウヅマク（洄）1。ウベナフ（許諾）1。ウム（侮）1。ウヤマフ（敬）3。ウル（買）2。ウルホス（潤）17。ウルホフ（霑）10。オゴカス（驕）1。オソフ（襲）3。オヒウツ（逐）2。オヒヅ（逐）1。オブ（帯）7。オモテアカム（被）1。オモヒハカル（慮）3。オモヒミル（惟）64。オモミル（意欲）1。オモムズ（重）13。オモムミル（以）1。オヨボス（及）1。カカハル（拘）2。カカフ（拘）1。カガミル（鑑）9。カカヤカス（輝）5。カク（欠、四段）4。カク（缺、下二段）13。カグ（聞）2。カケハシス（梯）1。カコム（圍）2。カシク（炊）1。カタチヅクル（形）1。カタドル（狀）6。カフ（買）7。カヘズ（不肯）1。カヘニズ（不肯）1。カル（駈）9。カロムズ（輕）7。キザム（刻）7。キソフ（競）10。キタス（來）3。キタル（來）150。キハマル（窮）18。キヨム（清）2。キラフ（嫌）1。キル（切）19。ククル（括）1。ククル（潜）2。クチススグ（晒）2。クツガヘス（覆）1。クラフ（食）7。クラマス（晦）1。クルシブ（苦）4。クルシム（困、四段）1。クルフ（狂）1。ケス（消）1。コゾル（擧）2。コトトス（事）5。コュ（寒）2。コラス（凝）12。コル（樵）1。コル（凝）1。コロフ（磁石）1。サイギル（邀）3。サカノボル（逆）3。サガル（垂）1。サク（裂、四段）5。サク（裂、下二）1。ササフ（支）1。サシマネク（麾）3。サフ（障）2。シカアリ（然）5。シカス（然）1。シカナリ（然）9。シカリ（然）2。シタガフ（従、下二）3。シタダル（滴）3。シタム（漉）1。シノグ（陵）4。シボム（離）1。シリウタグ（踞）1。シリゾク（居、下二）5。スフ（吸）2。スブ（惣）9（スベテは副詞で別語とする）。スマス（栖）1。セメグ（闘）1。ソソク（注）12。ソナハル（備）8。ソナフ（備）13。ソバダツ（峙、四段）3。タガヘス（耕）1。ダク（抱）6。タクハフ（蓄）7。タクム（工）2。タグル（縁）1。タクラブ（較）3。タシナム（困）3。タス（足）1。タタカフ（戦）1。タダサハル（携）2。タタフ（讃）1。タタム（疊）5。タツ（絶）22。タヅサフ（携）2。タトブ（遷）2。タノシブ（楽）1。タヒラグ（剪、下二段）1。タフス（倒）1。タフトブ（尊）22。タメニス（爲）1。タヨリス（便）1。チカヅク（近、下二段）1。チリバム（鏤）1。ツカル（疲）7。ツク（築）2。ツヅマル（促）3。ツヅル（綿）1。ツノル（募）3。ツバクム（透）1。ツヒヤス（費）1。ツマヅク（巻）2。ツミス（罰）2。ツユ（費）2。ツラナル（連）10。ツルハ

グ（紘）1。ツエック（杖）3。テアラフ（盥）3。テウツ（扑）2。テラフ（衒）1。テル（光）13。トク（説）64。トドコホラス（滞）1。トナフ（唱）2。トナリス（隣）1。トバス（飛）7。トビクダル（頭）1。トビノボル（頭）1。トム（富）3。トモス（慕）1。ナカダツ（媒）2。ナジラフ（徴詰）1。ナゾラフ（擬）1。ナヅク（名）58。ナンナムトス（垂）6。ニナフ（荷）18。ヌキアシス（跼）2。ヌキヅ（抽）4。ノゾカル（除）1。ノゾク（除）11。ノゾコル（除）3。ノトル（紀）5。ノリトル（範）1。ノル（罵）1。ハカリミル（計）1。ハク（掃）1。ハク（吐）2。ハス（馳）13。ハナススリス（嘘咽）1。ハナヒル（遮）1。ハバム（徂）1。ハビコル（漏）3。ヒイヅ（秀）2。ヒサグ（提）1。ヒザマヅク（跪）4。ヒシグ（冥）1。ヒヅ（秀）4。ヒヒル（沖）1。ヒルガヘス（翻）1。ヒルガヘル（翻）1。ヒロマル（廣）2。フケル（耽）1。フサガル（雍）1。フサグ（塞）3。フサナル（疎）1。フサフ（擁）1。フタタビス（再）1。フトコロニス（懐）1。ホス（欲）71。ホダス（嗾）1。ホドコス（施）34。ホドハシル（踊）3。ホユ（吼）3。ホロブ（亡）3。マウアフ（逢）1。マガル（曲）1。マジハル（交）23。マタガル（跨）1。マツリス（祭）1。マツル（祭）2。マトフ（纏）2。マネニス（言）3。マミユ（見）8。マミル（見）1。ミヅアム（浴）1。ミミキル（聴）1。ミヤコス（都）2。ムクユ（報）8。ムサブル（刃）1。ムス（蒸）2。ムチウツ（笞）1。メアハス（妻）2。メトル（娶）1。モダス（獣）6。モチテス（以）31。モノイフ（語）1。モヤス（然）2。モル（盛）1。ヤスムズ（安）1。ヤトフ（雇）1。ヤフサガル（恢）2。ヤマヒス（病）4。ユメニミル（夢）1。ユメミル（夢）6。ヨヅ（拳）3。ヨミス（嘉）5。ワカス（涌）1。ワキアガル（沟湧）1。ワク（涌）3。ワシル（趁）2。ヲドル（踊）4。ヲノノク（戦）1。

⑬源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

アガム（崇）6。アザケル（嗤）1。アヅカル（預）11。アハレブ（憐）6。アフ（敢）1。アブル（溢）4。アム（編）2。アヤシブ（怪）3。アヤシム（怪）8。アヤブム（危）1。アユブ（歩）1。イタス（致）51。イツハル（偽）4。イヌ（寝）2。イマス（在）23。イル（射）2。ウウ（餓）2。ウバフ（奪）7。ウラナフ（占）2。ウルフ（潤）20。オシヒラク（排）1。オソル（恐）20。オモブク（赴）18。カウブル（冠・蒙）59。カガマル（傴）1。カタブク（傾、下二）10。カナシブ（悲）18。カムガフ（考）12。キハム（窮）63。クツガヘル（覆）3。クハダツ（企）1。コヒネガフ（尚）6。コロス（殺、懲）14。サキダツ（先、下二）1。サヅク（授）14。サトス（喩）1。シク（如）18。シメス（示）30。シルス（書）10。ススグ（濯）2。ススル（啜）1。セマル（逼）2。ソビユ（聳）4。タウトブ（遵）1。タヅネミル（尋）4。チカフ（誓）7。ツナグ（繋）4。ツヒユ（費）2。トホザカル（遠）1。ナゲイル（投）2。ヌク（抜、四段）12。ハク（著）1。バフ（奪）1。ハラム（孕）3。ヒキヰル（率）1。ヒタタク（混）4。ホロボス（亡）5。マグ（曲）

2。マジフ（交）3。マドハス（迷）1。マナブ（學）19。マヌガル（免）8。マロブ（轉）1。ミツ（充、下二）6。ムサボル（貪）6。メグム（矜）2。ヤシナフ（養）6。ヤドス（宿）1。ヤハラグ（諧）1。ヤブル（破、下二段）8。ヨギル（過）11。ヨコタハル（横）1。ワヅラハス（累）1。エガク（畫）2。エル（彫）5。ヲハル（終）12。ヲフ（終）21。

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。（省略）

㈣、名　詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

アサ（麻）1。アジカ（貲）1。アシアト（脚跡）1。アタヒ（價）2。アヅマヅ（鄙）1。アブラ（油）1。アミ（網）3。イクサ（軍）2。イサメゴト（諫）1。イシズヱ（礎）1。イシダ（鹵）1。イタナミ（暇）1。イチ（市）3。イチグラ（肆）1。イトスヂ（縷）1。イナゴマロ（蝨）1。イナヅマ（電）2。イヒ（飯）2。イヒ（謂）2。イラカ（甍）1。イロクヅ（鱗）4。ウサギ（兎）1。ウサギマ（騾）3。ウツクシビ（慈）5。ウツバリ（梁）1。ウナジ（項）1。ウミカヒ（蟹）1。ウルシ（漆）2。ウヲ（魚）4。オキツチ（基）1。オトガヒ（頷）3。オバシマ（檻）1。オホトリ（鳳）1。オムモノ（佩）1。オモムバカリ（慮）10。カウベ（首）14。カカヅラヒ（係）1。カガリ（畚）1。カタギ（規）1。カタナ（刀）6。カチモノ（捷）1。カナヘ（鼎）1。カハベ（肌）1。カハヤ（涸）1。カハラブキ（甎）1。カヒコ（卵）2。カヘル（蛙）1。カムハタ（綺）1。カモ（鼈）1。カモメ（鷗）1。カヤクキ（鼈）1。カユトキ（解齋）1。カラナシ（柰）1。カリテ（粮）1。カリビト（獵人）1。カルサ（輜）1。キキ（聞）4。キモノ（服）2。クキ（莖）1。クシ（刺）2。クソ（糞）1。クチバシ（喙）1。クツバミ（轡）3。クモ（蜘）1。クラ（鞍）1。クラホネ（鞍橋）1。ケ（毛）1。コブシハジカミ（蜀椒）1。コメ（米）1。サカ（坂）1。サル（申）2。シロ（城）79。スウヤ（巢）1。スズ（鈴）1。スズミ（雀）2。スナ（砂）1。タクミ（巧）1。タタサ（袞）2。タタリカタ（禰）1。タテ（盾）1。タナゴコロ（掌）4。タマキ（釧）1。タマヒモノ（瑕）1。タマリミヅ（行潦）2。タルキ（椳）1。チ（血）1。チマタ（衢）5。ツカムヒト（使人）1。ツクリミヅ（漿）1。ツチ（槌）2。ツツ（管）1。ツビ（粒）1。ツルギ（刃）4。ツエ（杖）1。トヒ（問）3。トブヒ（烽）2。トボソ（鍵）1。トリコ（俘）1。ナベ（釜）1。ナマエ（楷）1。ナラビ（儔）1。ニジ（虹）5。ネズミ（鼠）1。ネブリ（睡）1。ノキズケ（桧）1。ノムド（喉）3。ハカリコト（圖）4。ハカリ（稱）2。ハギ（脛）1。ハハキ（帚）2。ハリ（針）3。ヒヂ（臂）5。ヒヂリコ（泥）2。ヒトトナリ（性）1。ヒノエ（景）2。ヒボ（紐）1。ヒロサ（廣）14。フムダ（札）1。フムデ（筆）9。ヘビ（蛇）1。ホコ（戈）5。ホマレ（譽）6。マサカリ（鉞）5。マナコ（眼）24。ミギリ（砌）1。ミゾ（渠）1。ミナマタ

(派) 1。ミナモト(源) 14。ムササビ(鼯) 1。ムラ(村) 6。ムラ(群) 1。メグミ(惠) 1。モ(喪) 1。モダヒ(婪) 1。モトドリ(髻) 2。モモ(桃) 1。モモ(膞) 1。ユビ(指) 2。ヨシミ(好) 1。ワザウタ(謳) 1。ヰ(井) 2。ヰノコ(豕) 1。ヲカ(岳) 4。ヲフト(夫) 1。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用例が極めて稀なもの。(一例しかないものを主とする)

アタ(讎) 2。イハヤ(窟) 5。エ(柄) 1。オモサ(重) 1。クビ(頸) 2。ケダモノ(獸) 2。シタ(舌) 1。タカサ(高) 61。タカラ(寶) 25。タキギ(薪) 1。ツカ(塚) 1。ツヅラヲリ(盤) 1。トザシ(鍵) 1。トモガラ(輩) 27。ナシ(奈) 2。ヌノ(布) 1。ノリ(範) 5。ハタ(旗) 11。ハナブサ(葩) 1。ホネ(骨) 10。ムチ(策) 1。ムツキ(褓) 1。ムネ(旨) 23。モトヰ(基) 5。ヤ(矢) 3。ワ(輪) 3。ワキ(腋) 1。

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。(省略)

(三)、形容詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

イサギヨシ(清) 5。イソガハシ(忙) 2。イタヅカハシ(煩) 5。カマビスシ(喧) 5。ケガラハシ(穢) 2。コトムナシ(好) 1。サガシ(峻) 9。タクマシ(快) 1。タダシ(正) 13。タノシ(樂) 1。トボシ(乏) 2。ハナハダシ(甚) 7。マサシ(正) 1。モシ(茂) 8。ユルシ(緩) 2。カクノゴトシ(如是) 65。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

アツシ(厚) 19。〔源氏2例。玉鬘巻地の文。椎本巻地の文〕

クサシ(臭) 1。〔源氏1例。帚木巻博士女の詞〕

ケハシ(峻) 1。〔源氏1例。總角巻地の文「けはしき風のをと」河内本●別本に「はけしき」とある本あり〕

ナホシ(直) 2。〔源氏2例。薄雲巻源氏の詞。總角巻地の文〕

マタシ(全) 7。〔源氏2例。東屋巻地の文2例〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。(省略)

(四)、代名詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

ナムダチ(女等) 7。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。

ナムヂ(女) 43。〔源氏1例。柏木巻漢文語句引用〕

Ⓒ源氏物語にも見えるもの。

イクバク(幾) 3。イヅコ(何) 5。イヅレ(何) 9。カノ(彼) 70。カシコ(彼) 31。カレ(彼) 28。コノ(此) 228。ココ(此) 80。コレ(是) 507。ソノ(其) 520。ソレ(其) 18タレ(誰) 9。ナニ(何) 24。ナニヒト(何人) 6。ワガ(吾) 31。ワレ(我) 60。

(五)、形式名詞

Ⓐ源氏物語に見えないもの。

オホムタメ(奉爲) 1。ミモト(所) 1。

右はどちらも尊敬の表現であることに注意される。

Ⓑ源氏物語にも見えるが用法や用例が限られてゐるもの。　なし

Ⓒ源氏物語にも見出されるもの。

アヒダ（間）46。ウシロ（後）3。ウチ（中）180。ウヘ（上）41。カタ（方）2。カタハラ（傍）65。カミ（上）12。シタ（下）25。シリヘ（後）9。タメ（爲）105。トキ（時）102。トコロ（所）445。ナカ（中）6。ノチ（後）140。ヒト（人）96。ホカ（外）46。ホトリ（邊）6。マヘ（前）38。ママ（儘）2。モノ（者）217。ユエ（故）5。ヨシ（由）3。

第三章　異なり語數と使用回數

次に、語彙の異なり語數と使用回數とを、語性別に表示する。（第二表）（語彙計算の基準は36頁の第一表と同じ）

「Ⓐ源氏物語と見出されないもの」と「Ⓑ源氏物語にも見出されるが用法や用例が限られてゐるもの」とを合はせたものを「訓點特有語」と呼ぶことにする。但しこの術語がここで直接指し示す意味は、この「慈恩傳古點」に用ゐられてゐる語の中で源氏物語に見えないもの、といふ、どこまでもそれだけの意味であつて、これが取りも直さず全訓點資料に特有であり、しかも全假名文學語資料に見出されない語彙だと言ふのではないのである。嚴密に言へば、他の資料についての調査は、更に又別個に行ふべきものである。それから、最初にも斷つたことだが、この調査は和語だけについてであつて、字音語は含んでゐない。字音語については後に述べることにする（注7）。

〔第二表〕　大慈恩寺三藏法師傳古點所用語彙統計表

		異なり語數				使用回數			
		Ⓐ＋Ⓑ	Ⓒ	Ⓐ＋Ⓑ＋Ⓒ	(Ⓐ＋Ⓑ)/(Ⓐ＋Ⓑ＋Ⓒ)	Ⓐ＋Ⓑ	Ⓒ	Ⓐ＋Ⓑ＋Ⓒ	(Ⓐ＋Ⓑ)/(Ⓐ＋Ⓑ＋Ⓒ)
		訓點特有語	物語と源氏通ずる語	計	訓點特有計	訓點特有語	物語と源氏通ずる語	計	訓點特有計
3	接續詞	23	0	23	100.0%	429	0	429	100.0%
4	感動詞	3	0	3	100.0%	5	0	5	100.0%
5	陳述副詞	34	4	38	89.4%	984	98	1,082	90.9%
6	情態副詞	62	42	104	59.6%	1,667	1,399	3,066	54.4%
7	形式語の特殊用法	5	4	9	55.6%	251	235	486	53.3%
8	程度副詞	7	4	11	63.4%	121	123	244	49.5%
9	形容動詞語幹	26	27	53	49.1%	138	391	529	26.1%
10	特殊な副詞	17	27	44	38.6%	257	828	1,085	23.8%
11	動詞	335	454	789	42.4%	2,168	9,990	12,158	17.8%
12	名詞	172	282	454	37.8%	596	2,941	3,537	16.3%
13	形容詞	21	71	92	22.8%	159	1,358	1,517	10.5%
14	代名詞	2	16	18	11.1%	50	1,629	1,679	3.0%
15	形式名詞	2	22	24	8.3%	2	1,594	1,596	0.1%
16	總計	709	953	1,662	42.7%	6,827	20,586	27,413	24.9%

〔注〕 1. ⒶⒷⒸの符號の表はす意味は本論第二章と共通である。
2. この表でいふ「訓點特有語」とは，この古訓點に見える範圍内の語で，源氏物語に見えないか，又は用法や用例の限られてゐるものを指す。

この表によつて、次の諸項が知られる。

(イ)、この古點に見える和語の異なり語數は、1,662 語であり、その中で訓點特有語（上述の記載參照）が 709 語で、全體の 42.7% に當る。卽ち、十語の中で四語强は訓點特有語だと言ひ得る。

(ロ)、使用回數は、總計 27,413 回で、その中、訓點特有語が 6,827 回あつて、全體の 24.9% を占め、大體四回に一回位訓點特有語が使用されてゐることになる。

(ハ)、(イ)と(ロ)とによつて、訓點特有語の一語當り平均使用回數は約 9.6 回であるが、これに對して、源氏物語と共通の語彙では約 21.6回となつてゐる。この際、特有語より共通語の方が平均使用回數が多いといふことが言ひ得る。

(ニ)、語性別に分類した中で、4感動詞や7形式語の特殊用法は用例が少ないから確實性は低いのであるが、次のやうなことが言へる。

(A)、3接續詞・4感動詞・5陳述副詞には特有語が最も多く、異なり語數で 80% 以上、使用回數で 90% 以上を占めてゐる。時枝博士は、すべての語を詞と辭とに二大別してこの接續詞・感動詞・陳述副詞は三つとも辭に入れられるが（注8）、丁度これらが何れも訓點特有語の比率が高いことは、尚種々の問題を藏してゐるやうに見える。

(B)、右に次いで、6情態副詞・7形式語の特殊用法・8程度副詞が、異なり語數で 55% 以上、使用回數で約 50% 以上を占めてゐる。

(C)、右につづいて、形容動詞語幹・特殊な副詞・動詞・名詞の順で率が下るのであり、形容詞・代名詞・形式名詞では訓點特有語が非常に少ない。

(ホ)、特有語が全體總數の中で占める比率を、異なり語數と使用回數とで比較して見ると、表示の通り、殆ど平行して並んでゐる。この表では、使用回數の比率の順に並べたのだが、異なり語數の方でも殆どこの順に並ぶ結果となり、順序の狂ひは、7と8、10と11とが夫々入れ替つただけに過ぎない。

(ヘ)、形容詞は、古代の國語文獻では、一般に、形容動詞よりも異なり語數が多いと言はれてゐる（注9）。この訓點資料で見ると、和語だけでは、形容詞の方が多く（形容詞92、形容動詞53）この點では他と同樣であるが、この他に字音語を算入すると、形容動詞は總計 554 語となつて形容詞よりも遙かに多くなり、この點一般の文獻に比べて特異である。

字音語は、その單位の認定のしかたに多くの問題があると思ふ

〔第三表〕

形	和語 異なり語數	和語 使用回數	和語 一語當り平均使用回數	字音語 異なり語數	字音語 使用回數	字音語 一語當り平均使用回數
名詞（代名詞・名詞を含む）	496	6,812	13.7	8,139	17,238	2.1
動詞	789	12,158	15.4	1,397	3,141	2.3
形容動詞ナリ活	53	529	10.0	359	450	1.3
形容動詞タリ活	0	0	0	142	160	1.1
計	1,338	19,599	14.7	10,037	20,989	2.1

〔第四表〕

	異なり語數	使用回數	一語當り平均使用回數
和語	1,662(14.2%)	27,413(56.6%)	16.6
字音語	10,037(85.8%)	20,989(43.4%)	2.1
計	11,699(100.0%)	48,402(100.0%)	4.1

が、一往「法師」「出家ス」「廣大ナリ」「巍々タリ」等を各一語とする立場によつて數へた所、第三表・第四表のやうな結果を得た。この表から次のことを知る。

一、所謂形容動詞タリ活用は和語に見えず字音語だけに見える。

一、字音語の異なり語數は和語よりもずつと多く全體の 85% 餘に上るが、一語當りの平均使用回數が低いために、總使用回數は、43.4%に止まつてゐる。それでも訓讀文に出て來る語彙の回數の半數近くが字音語といふことになる。

〔第五表〕

大野氏の分類	本稿の和語の分類(第二表、その他に字音語を加へた)	慈恩傳古點	源氏物語
名詞	12.14.15.	8,635 (73.8%)	6,501 (44.3%)
形容動詞	9.	554 (4.7%)	683 (4.6%)
形容詞	13.	92 (0.8%) (5.5%)	1,130 (7.7%) (12.3%)
動詞	11.	2,186 (18.7%)	5,554 (37.8%)
その他	3.4.5.6.7.8.10.	232 (2.0%)	820 (5.6%)
計		11,699(100.0%)	14,688(100.0%)

次に、大野晋氏の論文(注10)に見える源氏物語の異なり語數を語性別にこの資料と比べて見る(第五表)。算定基準が少し異なるから、この比較は嚴密ではないが、大野氏の「第八表」のグラフに當てはめて見ると、表の外の遙か左側にはみ出し、最右端にある源氏物語とは最も相隔つてゐることになる。形容詞と形容動詞とは上下關係が逆で、大野氏の斜直線を垂直に切ることは出來ないやうだが、共に形容語であるこの二者を合した總計の%が、源氏物語 12.3% に對し、慈恩傳古點が 5.5% であることは、この訓點資料の性格の表はれとも見得ると思ふ。

第四章　訓點特有語彙の特性

第二章に列擧した諸語彙のうち、Aと Bとは、「慈恩傳古點」に見えるのに對して、源氏物語には見えないか、又見えても用法や用例の限られてゐるものをさすのであつた。この際、これらの語彙が源氏物語以外の假名文學作品、例へば古今集・宇津保物語・枕草子などに於ても、同樣に用例が見えないかと言ふと、それは今の所未だ斷言出來ない。殊に、動詞や名詞などの中でも、比較的個別的な概念を表はす語では、表現の素材の如何によつては、本稿で A又は Bに掲げたものでも、假名文學作品でも源氏以外のものならば、用例が見える可能性は相當に多いと考へられるのである。しかし一方、大體、抽象的・普遍的な概念を表す語である、接續詞や副詞や形容詞や一部の動詞などは、源氏物語に見えないと同樣に、他の同類文獻にも源氏物語におけると同樣、見出され

ない可能性が大きいと見てよいのではないか。現に、それらの文献を大略見渡した所では、この見通しに大きな誤りはないやうに見受けられる。雅言集覽・大日本國語辭典・大言海などを見ても、本稿で訓點特有語として擧げた語彙の多くについて、平安假名文學作品の類の用例は擧げてゐないやうである。

訓點特有語のうち、轉成副詞や接續詞の一部については、既に先學によつて指摘されたものも相當にある（注11）。けれども、それらの先行文献に說き洩らされた語彙が存外に多く存在することは注意すべきである。副詞の中でも、動詞などから轉成したのでなくて、本來の副詞の類（形容動詞語幹を含む）や、動詞・形容詞などの中には、今日我々が普通に用ゐてゐる語彙で、源氏物語に見えず、訓點にだけ見えるものが誠に多いことが判るのである。ハナハダ・スミヤカニ・アタフ（與）・カカハル・カロムズ・イサギヨシ・カマビスシなど、何れも今日でも日常身近な語彙である。これらの古點特有語は一々詳述する暇はないけれども、殆どすべては他の訓點資料にも用例が見えるものであつて、これらは當時訓點用語として廣く用ゐられてゐたことを知るのである。これらの語彙は、どのやうな流れに乘つて今日まで傳へられて來たのであらうか。漢文の訓讀、訓點の傳統によることはいふまでもないが、外に、變體漢文や和漢混淆文の流に負ふ所も多いのであつて、その種の文献には、上に記した訓點特有語の例が多く見える。しかし、この問題は更に稿を改めて論じなければならない。又、源氏物語を始め、當時の假名文學作品の中に例外的に少數存してゐる訓點特有語についても、夫々個々に處理されなければならない。

次に、訓點特有語彙を集めて見渡して考へると、何故このやうな語彙が特有語として用ゐられてゐるか、その原因には、大略三つのことが考へられると思ふ。

第一は、訓點の原になつた漢文に起因することで、表現の對象となつた事物や概念そのものが、假名文學作品に見えない場合である。シナや印度などの人名・地名・書名・特產物の名稱など、（それは多くは訓點では字音語で表はしてゐるのだが）これらが源氏物語などに殆ど見えないことは寧ろ當然である。それから、そのやうな外國の事物でなく、日本に當時存在した事物の名稱であつても、源氏物語には見えないものが相當ある。これは第二章凸の名詞の項を參照されれば殊にはつきりすると思ふが、動物の名、植物の名、鑛物の名、人體の諸部分の名、建築物關係の名、食物の名、自然現象、地理地勢關係、商業關係のものなどに殊に多いことが判るであらう。これらの事物が當時日本に存在したらうことは、和名抄などに多く見えることからも、容易に推測出來ることだが、これらが源氏物語に見えないのは、その作品が心理描寫を中心とし、又、貴族的雰圍氣の中で、表現の對象とすべき事物が相當に局限されてゐたことをも、物語つてゐると言へるだらう。

次に、第二の點としては、訓點の原となつた漢文そのものではなく、表現對象は一往同じ（「同じ」といふことも實は色々檢討を要する事柄だけれども）であるが、表現者の表現態度の相違によつて、語形が二つに分れる場合である。シム（訓點）とス・サス（假名文學）、ゴトシ（訓點）とヤウナリ（假名文學）などは、その典型的な例であつて、既に周知の事實（注12）であるが、このやうな二形對立は、これ以外にもその例が極めて多いことが、上述

の結果から導き出されるのである。これは、助動詞や助詞ばかりでなく、副詞・形容詞・動詞から、更に名詞の類にまで及ぶやうである。次にその一部の例を掲げる。

〔名詞の例〕（片假名が訓點、平假名が假名文學作品）オバシマー勾欄（こうらん）。トモガラーひとびと。ヲフト（夫）ーをとこ。カウベーかしら・みぐし。マナコー目（め）。ユビーおよび。カヒコ（卵）ーかひ。クモ（蜘蛛）ーささがに。カタナ・ツルギーたち。（但しこの際、平假名の形が訓點に見えることもある。とにかく片假名の形は源氏物語に見えないのである）

〔動詞の例〕アタハズ（不能）ーえ…ず・…あへず。イキドホルーむづかる。イコフーやすむ。イソフ（競）ーきほふ。イヌ（寢）ーぬ。イマスーおはす・おはします。ウカルーあくがる。ウベナフーうけひく。ウム（倦）ーあく。ウヤマフーかしづく（?）。オソルーおづ。オヨブーいたる。カウブルーかづく。カク（缺）ーなし。キソフーきほふ。キタスーこさす。キタルーく。キハムーいたる（?）。クルシブーくるしがる。ケスーけつ。コゾルーかぎる（?）。コヒネガフーねがふ。サイギルーへだつ。サク（裂）ーやる。サヅクーたまふ・たまはす。シリゾクーしぞく。ソナフーまうく。タタフーほむ。ツカルーこうず。ツラナルーならぶ。フケルーすさぶ（?）。フサガルーふたがる。フサグーふたぐ。ホドコスーたまふ（?）。マジハルーまじる。マジフーまず。

〔形容詞の例〕イサギヨシーきよらなり・うるはし。イソガハシーいそがし。カマビスシーかしがまし。ハナハダシーいみじ。モシーしげし。

〔形容動詞語幹の例〕イルガセーなほざり。オゴソカーいかめし。オダヒカーおだし。スコシキーすこし・わづか。スミヤカーはやし・とし。ナナメーなのめ。ヒソカーしのびに・しのびて。

〔情態副詞の例〕アラカジメーかねて。アルイハーあるは。イマシーいま。コトゴトクーすべて。コモゴモーかたみに。シキリニーしばしば。シバラクーしばし・とばかり。スデニーはやう。タガヒニーかたみに。タマタマーたまさかに。タヤスクーたはやすく。ツトニーはやく。マノマタリーただに。ママーときどき。ミダリニーみだりがはしく。モシクハーもしは。ヤウヤクーやうやう。ヨリヨリーときどき。

〔程度副詞の例〕スコブル・ハナハダーいみじく・いたく。ホボーおほかた。マスマスーいよ・いよいよ。

〔陳述副詞の例〕アニーなど。アヘテーえ…（ず）。カツテーつゆ（…ず）。ネガハクハーいかで。イハムヤーまさに（…むや）。イマダーまだ。

第三の場合は、これは或る意味では第二の場合に含めてもよいのであるが、音韻又は假名表記上の差異によって、語形が異なるものである。訓點用語では、音韻の交替や音便（廣義の）が比較的多いやうに見受けられる。

〔母音同志が異なる例〕アヅマヅーあづまぢ。イタナミーいとなみ。ウダク・ダクーいだく。ウヲーいを。オゴカスーうごかす。ナナメーなのめ。ヲノノクーわななく。

〔訓點語の方に音便を生じた例〕コトムナシーこともなし。ソカムヒトーつかひひと。フムダーふみた。ヤヤムズレバーややもすれば。イカンーいかに。サカンーさかり。

〔假名文學語の方に音便を生じた例〕ヤウヤクーやうやう。シ

リゾクーし（ン）ぞく（この例は存疑）。

〔バ行音（訓點）とマ行音（假名文學）との對立〕（注13）アユブーあゆむ。イサブーいさむ。ウツクシビーうつくしみ。オモブクーおもむく。カナシブーかなしむ。ヒボーひも。

第五章　訓點特有語彙の語構成

以上の訓點特有語彙の中には、これを語構成の面で見ると、複合語や他品詞からの轉成語が比較的多いやうで、これらを幾つかのカテゴリーに分けて說明することが出來るやうである。この中の幾つかについては既に先學の論考もある（注14）。

㈠、動詞連用形＋テ→副詞。アヘテ。イタリテ。カサネテ。キハメテ。シタガヒテ。ツギテ。ナラビテ。ハジメテ。ハタシテ。マゲテ。モチテ。ヨリテ。

㈡、動詞連用形＋ニ→副詞。サイハヒニ。タガヒニ。ナラビニ。ハジメニ。ミダリニ。

㈢、體言・副詞＋ク→副詞。コトゴトク。シカクシテ（→シカウシテ）。

㈣、體言・副詞＋シ→副詞。イマシ。タダシ。ナホシ。

㈤、體言・副詞＋ニ→副詞。オノヅカラニ。コトゴトクニ。タメニ。トキニ。マサニ。ミチニ。モハラニ。ヤウヤクニ。

㈥、動詞＋語尾シ・ハシ→形容詞。イソガハシ（→イソグ）。イタヅカハシ（→イタヅク）。ケガラハシ（→ケガル・ケガラフ）。タクマシ（→タクム）。

㈦、體言・副詞＋語尾シ→形容詞。ハナハダシ（→ハナハダ）。

㈧、體言・形容詞語幹＋動詞→動詞。アセヅク。アナホル。アメフル。ウヅマク。カガミル。カタチヅクル。カタドル。クチススグ。サイギル。サカノボル。シタダル。シリウタグ。シリゾク。ソバダツ。タガヘス。タクラブ。チカヅク。ツマヅク。ツルハグ。ツエツク。テアラフ。テウツ。トホザカル。ナカダツ。ナヅク。ニナフ。ノ（リ）トル。ハナヒル。ヒ（イ）ヅ。フサナル。マボル。マミユ。マミル。ミヅアム。ムチウツ。メアハス。メトル。モノイフ。ユメミル。ヱガク。

㈨、體言＋ス→動詞。アミス。イヘス。イヘキス。シメス。ツミス。トナリス。ヌキアシス。ハナススリス。ホス（→ホリス）。マツリス。ミヤコス。モダス。ヤドス。

㈩、體言＋ニス→動詞。フトコロニス。マネニス。

(十一)、體言＋語尾フ・ナフ・ハフ・ム→動詞。イコフ（→息フ（イキフ）？）。フサフ。ウベナフ。トモナフ。アヂハフ。カコム（→垣ム（カキム）？）。キハム。ハラム。

(十二)、動詞の二語複合。これには音便を起してゐるものが多いのが特徴。ウチケツ。オシヒラク。オヒウツ。オヒヅ。オモヒミル。コヒネガフ。サシマネク。タタカフ。タヅネミル。トビクダル。トビノボル。ヌキヅ。ハカリミル。ヒキヰル。ヒサグ。ワキアガル。〔音便あるもの〕オモミル。オモムバカル。オモムミル。ツカマツル。

(十三)、形容詞語幹＋語尾ブ・ム→動詞。アヤシブ。アヤシム。アハレブ。アヤフム。イタム。イヤシム。カナシブ。クルシブ。クルシブ。タシナム。タノシブ。タフトブ。

(十四)、形容詞語幹＋ミス（ムズ）→動詞。イヤシムズ。オモムズ。ヤスムズ。ヨミス。

(4)、動詞連用形→抽象名詞・副詞。タトヒ。イヒ(謂)。オモムバカリ(慮)。キキ(聞)。トヒ(問)。ナラビ(儔)。ネブリ(眠)。ヒトトナリ(性)。メグミ(惠)。

以上のやうな語構成法は、その法則自體を見るならば、必ずしもすべてが訓點特有の法式といふわけではない(たゞ(4)などは訓點特有と見られる例だが)。けれども當時、源氏物語に用ゐる語ー日常會話語又はそれに近いものーを基として、日常語には用ゐないで訓點だけに用ゐる特殊な語形を、このやうな法式に則つて、意識的に、新しく作り出すことがあったのではなからうか。訓點特有語の中には、漢字の注によつて作った和訓(銅(アカガネ)・銀(シロガネ)の類、又、上述(4)など)が多かつたことと考へられるが、この他に、上述諸項のやうな方式で、漢字そのものの意味には直接關係なく、助詞や接尾語などを添加したり活用を變化させたりするやうに、單に和語の形式上の手法だけで、右に列擧したやうに新しく造語することも、行はれてゐたと考ふべきではあるまいか。

結び

訓點語彙に關して考ふべきことは、以上の外にもなほ山積してゐる。本稿は專ら共時論的立場に終始し、訓點語彙の中における上代古語の遺存といふ重要な問題には全く觸れなかったし、又、源氏物語との比較に當つても、源氏物語だけに見えて訓點に見えない語彙や、源氏物語の語彙使用回數の問題などもなほ檢討すべきである。ただ本稿によつて訓點語彙の性格の一端だけでも解明し得たとすれば、今後、變體漢文や和漢混淆文などの性格究明の爲に一つの手掛りともなるであらうと考へられるのである。

(一九五六年十月二十五日稿了)

〔付記〕統計學的處理に關しては水谷靜夫氏の敎示を仰いだ點が多い。記して謝意を表する。

(注1)「異なり語數」とは「單語のような、一定の基準で切り取った言語單位として形態上(および意味上)異なるものの數」の意で「異語數(イゴスウ)」ともいふ。「國語學辭典」の「言語量」の項(林大氏執筆)參照。「使用回數」は右の文獻に「延べ語數」とあるものと同概念で、言語單位の繰返し用ゐられた度數の總和をさす。例へば、「山」が3回、「川」が4回ならば、「異なり語數」は2で「使用回數」は7である。

(注2)拙稿「興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳古點(東京大學敎養學部人文科學科紀要第九輯、昭和三十一年六月)で、この訓點の全貌を概觀した。

(注3)中田祝夫氏「古點本の國語學的研究」一二七—八頁。

(注4)拙稿「中古漢文訓讀文の修辭法」國文學解釋と鑑賞第二十卷第六號、昭和三十年六月)

(注5)(注2)注の文獻參照。

(注6)この算定の基準についてはいろいろ論すべき點もあるが、ここには觸れないこととする。

(注7)尙、本稿では細かい數字を色々擧げるが、實はこの計算はすべて筆者作製の慈恩傳古點の索引によったのだが、この索引は未だ逐引もしてゐない未定稿である爲、遺漏のあることが豫想されるし、又計算そのものも、短時日の間に行つたので、幾らかの誤りもあるかと恐れてゐる。しかし大勢

に影響を及ぼすことは多分無からうと考へる。

（注8）時枝誠記博士「日本文法口語篇」その他。

（注9）大野晋氏「基本語彙に關する二三の研究―日本の古典文學作品に於ける―」（國語學第二十四輯、昭和三十一年三月）

（注10）（注9）の文献。

（注11）山田孝雄博士「漢文の訓讀によりて傳へられたる語法」諸所。春日政治博士「西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究」研究篇一二三頁・一五九頁・一六八頁・一七五頁など。遠藤嘉基博士「訓點資料と訓點語の研究」一九三―二〇九頁。中田祝夫氏「古點本の國語學的研究總論篇」六一―八六頁。など。

（注12）（注11）の諸文献、及び、山田巖氏「今昔物語集に於ける和漢兩文脈の混在について」（國語と國文學第十八卷第十號、昭和十六年十月）。堀田要治氏「如シと樣ナリとから見た今昔物語集の文章」（同上誌）。同氏「今昔物語集に於ける使役の助動詞ス・サス・シムについて」（國語學論集）。宮坂和江氏「三寶繪の文章に就て―個別的文章研究の一つの試み―」（國語と國文學第三十卷第九號、昭和二十八年九月）。拙稿「中古漢文訓讀文の文構造」（同上誌第三十一卷第九號、昭和二十九年九月）など。

（注13）遠藤嘉基博士上記著書八六頁。

（注14）（注11）の諸文献。

――東京大學講師――